
異世界召喚（二週目）・ハードモード（仮）

It.

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界召喚（二週目）・ハードモード（仮）

【Nコード】

N4806Z

【作者名】

It.

【あらすじ】

勇者として異世界に召喚されたユキトは、魔王倒した。目的を達成したので地球に帰らなければならないはずが、行き着いた場所には見慣れた景色が。森の中で再び会った彼と話をし、同じ世界であることを知る。時間を遡っていることも。倒した魔王にまた挑むため、ユキトは勇者としてまた旅に出る。

友情、恋愛、葛藤。さまざまな想いを描きながら突き進む、異世界勇者の物語。（ハードモード）

第一話『別れの言葉。』

異世界召喚なんてはた迷惑な概念がある。

平和な日常を、それにどんな感想を持っているのかは置いておくにしても、事情なんて無視をして無理やり自分たちの都合のいいようにある人物を自分たちの世界に呼び込む。

大抵の場合として、元の世界には帰れません。もしくは魔王だとか世界の敵を倒してくれば、なんて勝手なオプシヨン付きだ。自分たちのことしか考えていない。

召喚されてしまった人物は右も左も解らない世界で、頼れる相手がいるわけでもなく（たまに友人と一緒に、というのはあるが）非常に非情な世界に放りだされるのだ。召喚された場所、時、場合によつてはすぐに命の危機に瀕することだつて少なくない。

なかにはなんらかの能力や、生き抜くための武器を得て活躍する話なんてものはあるが、現実的に考えて不可能に近いだろう。その世界の常識^{ルール}によつて違つが、仮に武器を持って戦うことが普通の世界だとしてみよう。

武器は刃物。一般的に西洋剣と言われているものでいい。

さて、それをただの一般人が持とうとすればどうなるだろう。

答えは簡単だ。

そもそも持ち上がらない。

例え持ち上げようと、重さに耐え切れずに振ることなんて出来やしない。重さに耐え、振ることができたとしても、振り方を知らなければ、何もまともに切ることなんて出来ない。

それだけじゃない。武器を扱うための経験や知識。どこで使うべきかを取捨選択する思考。武器を振るう、つまり殺すということを受け入れる感情制御。

どれもが殺戮が日常な非日常世界では必要なものだが、平和な日常で過ごしたただの人では手に入れることなんて出来ない。

こんなふうには、剣一つにとっても問題視することがある。

他にも、生活基準、対人関係などなど不安なことなんていくらでも出て来る。

つらつらと述べてみたが、結局何が言いたいかというと、異世界召喚なんてお断り。迷惑でしかないってことだ。

もつとも、こうして批判しているのも、それを自分自身が味わったからこそ、なのだけでも。

喚ばれた【勇者】はただの【学生】だった。

もういつの日だったか、学校に忘れ物をして暗い校舎を歩いていた時、教室から不思議な暗い明かりが見えてた。自分の教室だったし、何なのか気になったのもあつて入ってみれば　　気付けば見知らぬ森の中だった。

そこからは森でいきなり熊キラーベアーっぽいなにかに襲われかけ、それを通りかかりの人物に助けて貰い、村に連れてかれた。まだ状況整理が出来ておらず、ありのままに喋ってみれば、勇者ではないのかと言われ王都へ連行された。

王都に着けば、まずは城に通され、異世界召喚をしたこと、勇者として魔王を討ってほしいこと、帰る方法は魔王を倒せばあるいは、なんてことをなんちゃらかんちゃら説明され、多少多めの路銀だけ持たされ、旅の仲間として【召喚の巫女】が付いてくるだけでさようなら。

展開に付いていけずに途方に暮れつつも、良い仲間にあつたことで少しずつ進み出していった。

そして、指の数では到底足りない死地の数々をくぐり抜け、つい先日、ようやく魔王を討つことが叶った。満身創痍での勝利ではあったが、その日の夜、大陸を越え、長く濃密な体験を共にした仲間たちとささやかに上げた祝勝会を忘れることはないだろう。

そして、自らの世界に帰るため、皆に別れを告げたあの日も。惜

しむ気持ちであつたが、元は地球の住民のため、いつまでも居続けるのは、あまり良いことではない。

密かながら、互いに思いを募らせていた相手、【召喚の巫女】のアリスティとは、別れの間際に向こうは常に身につけていたネックレスを、こちらは旅の間も持ち続けた、自分が地球にいた証でもある制服のボタンを交換した。その二つを魔力系^{パス}で結ぶことで、世界が違えども互いを感じることは出来る。

別れの儀式の時、仲間たちが目敏くも首にかかったアクセサリーが変わっているのを見付けられ、からかわれたのも恥ずかしながらも微笑ましく、別れの近さに淋しくなった。

そして、別れの時。

送還魔法陣の中心の真ん中にたち、友に旅をした仲間たちを見る。気付けば、勝手に口が動き、ひとりひとりと思い出を確認しあい、感謝の言葉を述べた。それだけでもう視界は滲んでいたが、目の前に列を作る仲間の中にいるはずのない『彼』が見え、ずっと言えずにいた感謝の言葉を送った。『彼』が微笑んだ気がするの、きつと気のせいじゃないだろう。

静かに泣く【勇者】に声をかけたのは、【召喚の巫女】だった。

【勇者】は最後に、想い人である彼女へ語りかけた。

弱くてごめん、と【勇者】は言った。

【召喚の巫女】はそれもあなたの優しさの一部だ、と言った。最初は嫌っていた私を、いまは受け入れてくれていることも、とも。成熟しきれない精神は弱く、されどそれが優しき証でもある【勇者】は、彼女の言葉に『ありがとう。俺は、お前をこの世界で一番好きだ』と、何よりも強い想いを伝えた。

それを最後に、魔法陣に魔力を流す。勇者の送還魔法では、召喚魔法と違って勇者自信の魔力を流すことで完成する。

じゃあな、仲間たちにそう告げ、彼らの思い思いの返事を耳に聞き入れた瞬間、視界に目一杯の光が入り、意識が暗転した。

さて。冒頭で異世界召喚を批判していたが、その異世界で過ごすことへの抵抗は、日々を追うことに少なくなっていたことは分かっている。貰えただろう。

だが、さすがに二度も同じ経験をするのはごめんだ、と、元【学生】、元【勇者】、現在は【??】のユキト・オームラは思わずにはいられない。

意識が目覚め、まず状況を確認してみれば 見覚えのない森の中にいた。

地球じゃないと分かった理由は、いつぞやの時とは違い、辺りにある植物や樹木の観察したためである。地球にはないであろう植物、そして虫がいた。

決定打には欠けたが、むやみに動かない理由にはなり、川を見つけて出して一夜を過ごそうと夜を迎えた。夜になって見上げた夜空には、光を反射させた星が二つ昇っていた。

見たことのあるその夜空に、ユキトはどうしようもなく不安に駆られるのだった。

第二話『森の中で再びお前と』

不安を胸に抱えながらも一夜を過ごした。待っていたのは、変わらない風景だけであつたが。

固まってしまった体をほぐすようにストレッチをする。適度に温まったところで、構えを作り、ステップ、軽くパンチと蹴りの確認をし、そこで気付く。

「……癖つて抜けないもんだな」

旅をしていた頃の習慣だった。毎朝誰よりも早く起き、見張りがたらに自主トレーニングをしていたのを思い出す。

いまでも特に意識をせず、自然とやっていた。少し寝ぼけながら、というのはあるが。

状況が変わっても、変わらないことはあるということを実感する。

「でも、野外で一人で夜を過ごしたのは初めてか」

ユキトが憂いたのは、故郷にある愛用のベッドではなく、背中を預けられる仲間たちだった。

旅に出た時から『召喚の巫女』のアリスティ、そしてあの世界で初めて会い、一番世話になった『彼』と一緒にだった。

ネックレスにぶら下がっている、小さな綺麗な石に触れる。アリスティが一番大切にされていて、彼女の魔力をが籠められたものだ。

いまは魔力を感じられいが、彼女の想いはいまでも感じる事が出来る。

そして、村人であり、ユキトが恩人、親友ともいえる『彼』のことを思う。

ありがとう、と呟き、ユキトはしばらく目をつむった。黙祷。これもまた、毎朝していることだ。

記憶に思いを馳せながら、また身体を動かす。

そうすることで、少し余裕が出来た。

この先、どうするかについて考えを巡らせる。

（どんな世界であるのかを知るのが第一だ。……月が二つってことは、可能性がないわけじゃないよな）

僅かながら希望を胸に燈す。ずっと見続けた夜空にも月は二つあったのだ。また同じ世界、という可能性だってあるはずなのだ。

そうすれば、また彼らに会うことが出来る。恐らく一生の別れを告げたというのにまた会うというのは、少なからず気恥ずかしいものはあるが、それもまた人生とでも言えるのではないか。少し頼が緩む。

だけど、理由がわからない。たしかに魔王は倒した。各国の抗争も落ち着いた。『勇者祭』とかいうので起きたインフラも収まりつつあったし、急激な経済的な落下もそこまで心配ない。なによりそんなことに勇者は^{ユキト}必要ない。

勇者であるユキトに求められたのは、魔物からの迫害を畏れる人民の希望だった。ユキトの物語の舞台は、小説にあるような人語を理解する魔族はおらず、本能のままの魔物ばかり。彼らを操るのが魔王で、人間とは異なる価値観をもった真正正銘の化け物だった。異種族はいたが、人間との関係は良好であり、問題は起きなかった。だから、魔物を統べる王だけを討てばよかったのだ。もつとも最後まで謎が解けないままに舞台を降りていった、魔将を名乗り人語を扱うイレギュラーはいたが、倒した以上はさほど問題視しなくてもいいだろう。

となると、やはり同じ世界だとしたら、また迷い混んでいるこの状況が不思議でしかないのだ。魔法の事故、とも考えたが、アリスティが失敗したところなどよほどのことがないかぎりありえないし、なによりあの部屋は彼女が万全であるために作られた部屋なのだから、事故の線は薄い。

「考えたところで、答なんて出るはずもない、か」

ユキトは魔法について学を持ち合わせていない。魔力を感じることは出来るが、魔法というに概念には馴染めなかったのだ。下手に地球で科学を習ってしまったのからかもしれない。何も無いところ

から、なにも使わず火を起こすのは理解しがたかった。

その代わりとでも言おうか、『氣』というものに関しての順応性はあった。

自らを高める闘気が、スポーツで気合いを入れる時の感覚に少なからず似ていたからだ。それもあって、ユキトは拳による戦闘を好む。他にも理由はあるが、自分に合っているからというのが一番大きい。

身体に巡らせていた『氣』を解き、呼吸を整えていく。落ち着いたところで、汗を流すために川に入ることにした。

着ているもの 着ていたのは、身体の動きを阻害しない麻布のズボンと絹の上着だった。を脱ぎ、下着だけの姿になってまずはそれを洗って日当たりのいい岩に干す。乾くのに時間がかかりそうなので、適度に川の探索をすることにした。

水は綺麗で、生き生きとした海藻が踊り、見たことのない形状や色をした魚が泳いでいる。

「綺麗だな……」

なにをする宛もないというのに……いや、宛もないからこそ、純粹な感想が口からこぼれ出ていた。よほど澄んだ川なのだろう。

そして川だけじゃなく、周りにある静寂な森。そこからは風の吹き抜ける音や、鳥の囀り、動物がいる微かな気配が伝わってくる。

そんなことを感じながら穏やかな時を過ごしつつ、日が良い感じに昇ってきたころだった。

そう遠くない川添いの辺りから、不意に物音がした。

自然の音ではない。明らかになにかが地面を踏んだ音だ。そこまですぐに考えを巡らせ、油断しきっていたことに叱咤しつつも振り返りながら臨戦体勢をとる。

振り返ったその先にいたものは いや、人物はユキトに驚愕を与えるには充分すぎる人物だった

「……………なんで……………なんで、お前、が？」

思っように声が出ず、掠れた音が耳をうつ。いつの間にかユキト

は目の前の人物を観察していた。そうすることで、違うということ
を確かめたかったのかもしれない。

青年だ。ユキトよりやや年上くらいで、髪は赤みがかった茶色。
遠目でも分かるくらいに、陽気な雰囲気が出ている。

目をひくのは、腰に剣をぶら下げて、膨らんだ革袋を担いでいた。
腰にあるその剣も、そしてその顔も見たことがある。

いや、見たことがあるレベルの顔じゃない。

ユキトが絶対に忘れないと誓い、そして忘れることも出来ないだ
ろう相手。

その彼は、担いだ革袋を地面に降ろすと、ユキトに一言

「久しぶりに来てみりゃ、珍しいこともあるじゃねえか。

よう。その野生児！

いい魚でもとれてるかー？」

間違いなく『彼』の声、そしてあの親しみ易い口調で問い掛けて
きた。

記憶にもあるその姿に思考が停止し、いつの間にかユキトは作っ
ていた構えを解いていた。

まるで旧知の仲である友人へかけるような快活さに、ユキトのこ
とを分かっているのかと疑う。もし知ってるのなら、『彼』は世界
の理と神様にすら逆らったことになる。

「どうして、だよ……」

『彼』と会ったのは、もう、一年近く前。あのときも森の中だっ
た。キラーベアーに襲われたユキトを助けた青年。

「なんで、お前が生きているんだ……アラム……っ！」

掠れた声が宙を震わせたが、どうやら『^{アラム}彼』には聞こえなかった
らしい。

「ん？　なんだ、そんなに驚くこともないだろ。いくら辺鄙な森だ
からって、誰とも会わないわけじゃねえんだからよ」

少々の外れなことを言いながらも、ユキトの姿を不思議に思った
のかゆつくりと近寄ってくる。その姿が近くなればなるほど、疑惑

は大きくなる。

近い川辺にまできて、彼の顔がすっかり見えた時、ユキトはもう疑うことを止めた。

どうみても彼はアラム。

かつてユキトと共に旅をし、そして彼を庇って世界をたつた男。

彼は水際にくると水面をみて、

「あつれ、魚がいねえな……」

ひとり落胆した。その呑気さに、毒気を抜かれたような気分になる。もうただ驚いているのが馬鹿らしくなった。脳天気はアラムの代名詞のようなものだったじゃないか。

それに。

ユキトはもう色々なことを経験している。地球という星の中にある、日本という土地で生きていたころから比べてみれば、有り得ないこと、それも空想上のものでしかなかったものが現実となっている。初めて遭った時には困惑し、なにも出来なかった。理不尽さに涙を流したこともあつたくらいだ。……これは誰にも言ったことはないが。

だが理不尽だといって喚くだけではどうにもならず、微かな希望を胸に一つの世界を救った。語り始めればキリがないそれを経て、ユキトは現実を認識して柔軟に受け入れるくらいのことは出来るようになった。

だったらいまもそうすればいい。

ここまで近くにきて、ユキトの顔を見てもアラムはなんの反応もしなかった。ユキトのことを覚えていないのか、わざとなのか、それとも知らないのか。

もし知らないとして、これが夢じゃないのなら、もしかしたら時間の移動でもしたのかしれない。そんな考えでも、無理矢理自分を納得させるくらいには、ユキトは非日常に慣れてしまっていた。

というより、非日常が、いつのまにか日常にすげ替わっていたのだけだ。

心を落ち着かせたところで、探るように声をかけた。

「あんだ、誰だ？」

「俺か？」

答えはもう予想がついており、ほぼ間違いないのだけれど、それでも聞かずにはいられない。短く返事をして先を促す。

「俺はカタイロの村のアラムⅡジトニコフだ。よろしくな」

にこやかな笑顔と共に返ってきたのは、いつの日にか聞いたことのある台詞だった。

知っている名。

かつて訪ねた地。

普通は初めて会う相手に言う言葉の『よろしく』を使ったこと。

ここまでくれば間違いない。いまユキトがいる世界は、時間をさかのぼった、ひとつ前と変わらぬ世界だった。

第三話『再会した彼は、記憶と同じで同じでない』

割り切ることにした。

なにを、と聞かれれば答えに窮するが。そんな状態が、ユキトの今の不安定な心境を物語っている。

すでに一度、『勇者』として知らない世界に放り込まれた経験があるため、当時よりは柔軟な対応が出来ている。わけもわからず、ただ困惑して何も出来なかったあの時よりは成長している。そうユキト自身は断言出来た。

だが、今回はその経験が逆に今のユキトを困惑へと蝕んでいる。同じ世界。

しかし時は遡り。

再会が不可能な友に再会する。

見覚えがない土地（結果的には知る土地だったが、ユキトはあまり覚えていない土地だった）に飛ばされたというのには、余裕があるなと自分で感心するほど冷静に対処が出来た。

一夜あけて。

不安も多少は解消され、とりあえずあてもなく水浴びをしている時に、それが起きた。

ユキトは切実に問いたい。

死んだはずの人間が生きているって、そんな話があるか？

夢じゃない。幽霊でもない。たしかに、生きている。

ユキトの記憶の中と変わらぬ姿で。けれど決定的に違う部分を携えて。

それは、ユキトのことを知らないこと。

困惑を示すメーターは知らず知らずのうちに振り切られた。だからだろうか。乗り越えた困惑は、ユキトに一時的にはあるが余裕を与えた。

余裕が出来たおかげで考えが巡り、同じ世界でも時間を遡ってい

るのではないかと仮定できた。そして、それらを割り切ることもし、それが出来たおかげで、アラムにもなんとか対応ができた。そして、そのままアラムに誘われる通りにユキトは森の中を歩いている。狩りをするためだ。

腹に何もいれないまま過ごしていたユキトは、アラムと話しているうちに不本意なことに盛大に腹が鳴ってしまった。それを聞いたアラムは、これ幸いとも言うように狩りに連れ出したのだ。

空腹を訴えている上に、狩りの経験があるのかも聞かずに強引に連れ出す姿に、同じだな、という感想を持ってしまふ。不意に過去の記憶が蘇り、足が止まる。

不意に止まったからか、アラムが声をかけてきた。

「こちら辺にたぶんいるぜ。ん？　どうかしたか、ユキト？」

「……いや、なんでもない。ちょっと考えごととしてただけだ。気にしないでくれ」

「あいよ。じゃ、気を張っていけよ。集中不足で獲物を逃がすなんてまっぴらごめんだ」

「そうだな。俺も早く空腹をなんとかしたい」

気を引き締めて歩き出す。ただ、頭の中ではどうも昔のことを思い出してしまう。

アラムと狩りをするのは、旅の中で何度もあった。要領がイマイチ分からないまま旅に出たので、食料が次の街まで持たないことがあったのだ。

そんな時はアリスティに木を集めて火を起してもらい、その間に近くにあった適当な草原や森、川でアラムと共に狩りをした。頻度がそれはもう多かったため、次第に狩りのスキルは自然と身についていった。

ただ、ユキトもアラムも罫は作れないし、弓もそんなに得意ではない。アラムは村の近くの森（つまり、いまユキトがいる森）で狩りの経験があったとはいえ、慣れない地では思うように事が進まなかったりもした。

その点、今回はアラムは地形や獲物を特徴を知っているため、かなり堂にいった狩りの行動をしている。今も狙い目の獲物がいるらしいエリアに入ってから、足音を殺し、周囲にかなり注意を向けている。

発見は予想以上に早かった。

「見つけたぜ」

アラムが指差す方向を見れば、暗い赤茶色の毛をずんぐりした身体に纏い、四足方向で移動するイノシシのような生き物がいた。

「あれは？」

「コトイノイってやつだ。肉は脂もほどよく乗ってて旨いし、大きな牙と比較的丈夫な毛皮は加工品としても重宝する。狩りの獲物としては、かなりアタリだぜ」

狙って探したただけだな、と言ってアラムは笑うが、ようはそのコトイノイという生き物が、森のどの辺りに住んでいるのか、どんな時にどこに現れるのか、そういった生態を知っているということだ。そういった所に詳しいのは、やはりアラムか、とユキトは変なところで感心する。

「さすが、狩りと資源集めだけで生計を立てれる体力バカなだけはあるな」

小声で呟く。こんなこと聞かれたら、アラムに叩かれそうだ。

弓や罠を使わない時点で効率的ではないし、体力バカも事実だしいいか、とひとり納得する。

「それで、どうやって仕留めるんだ？」

「もちろん、ユキトにも手伝ってもらうぜ。……あ」

「どうしたよ、いま重要なことを思い出した、みたいな顔をしてよ」

「ユキト、お前、狩りの経験ってあるか？」

「……………ようやくいま聞くのか。やっぱり、そういうところが抜けてるよな」

「う、うるせーな。すっかり忘れてただけだぜ！？ ……あれ、やっぱりってなにがだ？」

「あー、いや、なんでもない」 目の前にいるのが『アラム』だからか、いつの間にか砕けた口調を使ってしまう、内心焦るユキト。目の前の人物は、『アラム』ではあるけど、まだ初対面だということとを忘れないようにもう一度心に留める。

同じ世界でも、どんなことが起きるのか分からない以上、ユキトがすでにアラムのことを知っているのは、隠すべきだ。下手なことをして、不測の事態に巻き込まれるのは必ず面倒になる。

疑問を逸らすため、強引にでも話題を戻す。

「それで、狩りの経験はあるよ」

「そりゃよかったぜ。やつぱ人は見かけによらないな」

「どういう意味だよ、それ」

「会った時から思ったんだけど、ユキトってどうも優男みたいな雰囲気かな。生き物は殺せない！ ってなこと良いそうな顔をしてやがるぜ」

「……よく言われたよ。でも、生きるためだ。昔はそんな時期もあったけど、いまは躊躇わない」

『勇者』となつて間もない頃。まだ慣れない剣を扱おうと、必死になつていたころだ。

初めての狩りの時、『アラム』に同じことを言われた。その時は虚勢を張って、そんなことはないと言ったが、実際に目の前にいる獲物に剣を突き立てようとした時、どうしても出来なかった。その油断のせいで反撃をうけ、胸に怪我をした。その傷は、いまでも残っている。

生きるために躊躇をしてはいけない。それを忘れないために、回復魔法もあまりかけてもらわず、残したものだ。

「それでこそ男ってやつだぜ。やつぱ、男の生きがいには生きるか死ぬかを競い合うとこだな！ くーっ、わかるじゃねえか、ユキト！」

「ああ、そうだな。まずはあいつを狩って食うか！」

急にテンションが上がったアラムに苦笑しつつも、懐かしいそのノリにユキトも思わず合わせてお互いに手を立てて強く握り合う。

「やるぜ！」

「おう！」

お互いにやる気を高め合い、さあ狩りをしようと獲物の方をみれば
……

「あ、あれ？」

「……………いないな」

赤茶の体表をしたイノシシもどきは、いつの間にか消え去っていた。

ユキトとアラムが、逃がしたのは互いのせいにしだして、さらに周りから動物たちが逃げていったのは二人には預かり知らないことである。

第四話『仲の良さは不思議と変わらない』

「なんとかなつてよかったぜ。なあユキト」

この男は……。どうしてこんなに元気なのだろうか。

「アラム。初対面の相手にこういう押し付けるような言い方は好きじゃないが、今回の苦労の原因は確実にお前だ」

「なに？ 馬鹿言うんじゃないやねえ、違っただろ！ お前がさっさと、狩りに行こうとしないからだぜ！？」

「はあ？ お前があんだけ騒がなかったら、獲物が逃げるわけないだろ！」

ユキトとアラムの口喧嘩……というより、もうただのじゃれあい、狩りが終わって川のほとりについても続いていた。不毛な争いは、まだ終わりそうにない。

もつとも、どっちが悪いだ、悪くないだといひ合いつづけながらも、アラムは手際よくコトイノイを解体し、ユキトは肉を食べやすいサイズに切り取り、アラムが持っていた鉄串に刺してたき火にあてて調理をしている。この息のピッタリさは、二人の仲が良い証拠だろう。

初対面の相手に気兼ねなく接するアラムの快活さもあるが、ユキトが『アラム』を知っていることが大きかった。アラムの行動や癖は、ユキトにとってはすでに馴染み深いものであるのだ。

なにより、楽しい。

まるで、『アラム』と馬鹿騒ぎしているかのような……いや、アラムと馬鹿騒ぎをしているのだ。楽しくないはずがなかった。

アラムもアラムで、初対面のユキトと遠慮なく楽しんでいる。憎まれ口を叩きあっても、アラムの根は変わってない。それにユキトは少しだけ安堵した。

「にしても、ユキトと俺の息がピッタリだったな。驚いちゃったぜ」「俺もだ。ここまで合うとは思ってなかった」

ユキトの言い分は嘘だ。長い間を『アラム』と過ごし、何度も何度も近くで彼と戦っていたユキトにとって、アラムの動きに合わせてお互いに動きやすい位置取りをすることくらいは造作もない。

息が合うと言うよりは、ユキトがアラムに完全に合わせていた。

それができたおかげで、狩りの時間自体は、獲物を探すのに異常に時間費やしただけですんだ。仲良く（と本人たちが思っているかは微妙なところだが）騒いでいなければ、たとえ些細な危機を察知して逃げる野生の動物たちでももっと早く見つけることは出来たはずだ。

けれどユキトはその点には触れず、ゆつくりと楽しい時を過ごす。肉も焼けてきて、さあ食べようか、そんな時だった。ユキトの耳に、微かではあるが異音が届いた。

（草の音……風じゃない。もっとでかい何かが踏んだ音だ）

音の間隔から、人でないのは明らかだ。人とは違うリズムで刻まれる音から、四足歩行の何かだと当たりをつける。

「アラム。この辺りにいる……おい、一旦食うのを止める」

アラムが旨そうに頬張っている肉串を取り上げる。もちろんアラムは講義の声を上げるが、ユキトは無視する。

「あとにしろ、あとで。とにかく、いまこのあたりにいそうなやつは心当たりないか？」

「んだよ、ったく……。えーっと、この辺？　ここは川も浅瀬だし、どちらかと言うと森の外円部だしな。とくにいねえと思うぜ？」

「……そうか。ならいいけど」

「うつし、じゃあ返せって」

手にもっていた肉をアラムに返す。

「それに、例えなんかいたって大したやつは来ない。森の深部には、キラーベアーっていう厄介なやつもいるけどな」

キラーベアーという単語に少なからず反応してしまう。ユキトにとっては軽くトラウマものだからだ。

もっとも、アラムが言うにはこの辺りにはいない。なら大して心

配する必要もないか、と警戒をとくユキト。

結果的に言ってしまったえば、それは間違いだった。

ユキトが警戒を解き、自分の肉串を取ろうと手を伸ばした時、計ったかのように森の草影から飛び出してくる獣がいた。

獣は人の優に三倍はありそうな巨体を、信じられない速さで動き、砂利道をかける。

自分の定める獲物に向かって、威嚇の叫び声を上げる。久しぶりの獲物だ。逃がすわけには行かない。

そう思ったのかはわからないが、それくらいの気迫はありそうな勢いでようやくこちらに気付いた人間の“ひとり”に、自らの腕を振り下ろす。

鋭利な爪のついた丸太のような腕は、確実に目の前の人間……いや、食事を仕留めるだろう。

だが、その腕が目標に届く前に、突然側面から衝撃を受け、巨体が簡単に浮く。

「グウガツ……!!」

浮いた身体に追い打ちをかけるように、さらに側面から鈍い衝撃が加えられ今度は吹き飛ぶ。

吹き飛んだ先にある岩にぶつかり、身体を奮い立たせて立ち上がる。キラーベアーの見る先にいたのは、これもまた人間だった。

その人間がゆっくりと歩いてくる。

「させねえよ」

発せられた声が空気を震わし、キラーベアーの元へ届く。たとえ近くの村では、見たらなにもせずとにかく逃げると恐れられているキラーベアーだが、それとて森の住人である。

生まれもつてある野生のカンは、敏感にその声に含まれる意図を理解した。

慈悲なく、奢りない。純粹な敵意と殺意。

「もう、仲間は殺させない。絶対に」

逃げるという選択肢はなかった。それを許さない声に、キラーベ

アーは本能に従うままに飛び掛かった。

背水の陣、とでもいうべき状態で襲い掛かってきたキラーベアーをユキトは冷徹に見る。すでに四撃を叩き込んだため、右の脇腹あたりは陥没し、口から血が出ている。

優位であることを確認するが、油断はしない。目の前にいる獣は自分が何も出来なかった相手だ。

一度だけみたさっきの動きは、かつてのそれと同じかそれ以上であつた気がする。

手加減は、しない。

そこからはもう、一方的な戦いだつた。いや、戦いですらない、狩り。

キラーベアーの攻撃をすべて躲す、あるいはいなす、時には合カウせ打ちによって無傷でかい潜り、その度にキラーベアーは多大なダメージを受ける。

大地を陥没させる一撃は遂にひとつも届くことなく、一瞬で下に潜り込んだユキトは下から突き上げる。宙に浮いた身体は、それ以上動くことはなく。

重力に従い落下を始めた巨体を、トドメの回し蹴りが捕らえた。

地面を何度か撥ねて転がったダークブラウンの巨体から、完全に動きが感じられなくなってから、ようやくユキトは纏っていた【気】を解いた。それと一緒に安堵の息を吐く。

【勇者】だつたところに積んだ経験や鍛練は、過去の敵わなかった敵を越えるくらいにはなっていた。

付着した血を流すため、川で手を洗っていると、後ろから口笛と共に拍手が聞こえてきた。

「すげえな、ユキト。素手でのキラーベアーを倒すとは思わなかったぜ。助かった」

「たまたま、だろ。向こうも最初は俺に気付いてなかった」

「謙遜すんなって。あんだだけ余裕あつたくせによく言うな」

謙遜というわけではないが、たしかに余裕はあつた。身体を衝撃

から守るためにしか【氣】は使っていないし、攻撃はまったく食らっていない。

スピードも反射神経も、死に物狂いで身につけた自前のものだ。

「それだけの力もあれば、この森でフラフラしてても大丈夫だったわけだ。……って、そーいやなんでこの森に居たんだ？」

俺の村のそこじゃないなら、どっかから来たんだろ？」

「あーっと、それは……」

これは……どうしようか。

この森にいる目的はなにもない。気付いたらいたのだ。おそらく、また【召喚】されて。けど、それをそのままアラムに話してもいいのか。

『アラム』に会った時のように、説明すべきか。

「簡単に言えるようなものでもないし、とりあえず、戻って食べながらでもいいか？」

結論。とりあえず先延ばし。まずは美味しく肉を食べよう。

笑ってそういうユキトとアラムは、やはり仲の良いものだった。

第四話『仲の良さは不思議と変わらない』（後書き）

ユキトの無双……っばいですが、よく考えれば、序盤の敵で魔王を倒した勇者が一撃で屠れない相手は普通じゃないはず。

ちよっとずつ、二週目の片鱗が見え隠れし始めました。

第五話『あれ、なんか既視感……って、その肉は俺のだ!』

「異世界、ねえ……?」

アラムは珍しくもその顔を難しげに歪めながら、じつと焚火を眺めた。肉串の肉にかぶりつきながら。実に器用だ。

ユキトから森にいた理由を聞いたのだが、焦らされた挙げ句に聞いたのはわからない、の一言だった。

それで、はいそうですか、と言えるほどアラムは憤み深くはない。むしろアラムの長所は適度な思い切りのよさだ。引き際のギリギリまで攻めまくる。

そんなポリシーの元、渋るユキトからなんとか詳しく話を聞くと、正直なところ信じられないような事情があった。

別の世界　地球と言うらしい　があり、そこで争いごとのない平和な日常を過ごしていたら、歩いている時に突然、丸い紋様が足元に浮かび上がり、気付けば森の中にいたのだとか。

「信じにくいかもしれないけどな」

「……だな。でも、ユキト。お前、そんな平和なとこにいたわりには、随分と落ち着いてるし、さつきも信じられないような動きしてなかったか?」

しまった。

地球のことを少し詳しく話し過ぎたせいで、いま一番つかれると困るところを聞かれてしまった。

嘘は言わないように言ったが、まさか隠し事があって、それはすでに一度勇者としてこの世界を救ってお前にも会ったことがあるんだ、なんてことが言えるはずもない。心苦しいところはあるが、必要なことだと割り切って嘘をつく。

「平和とは言ったけど、昔はそりゃ戦とかはあったし、個人のいざこざも多い時代はあったからな。そういったところから伝わってる武術をやってたんだよ」

言ってから、ユキトはそんなに嘘というほどでもないか、と内心思う。実際にユキトが戦う術を得るために教えを仰いだ相手はとある武術の使い手だったし、基礎はその人から学んでいる。

殴る、蹴るは反復練習の賜物の我流とはいえ、武術を嗜んでいたというのは嘘でもない。

ただ、ユキトにたつて幸運なのは、アラムがその辺を気にすることがないことか。聞いた方がいいが、ユキトの返答で納得してほかに聞く様子もない。

「気付いたらここにいた、か。んー……もしかしたら……いや……違うか？」

アラムがひとりなにかを悩んでいる。ちらちらとユキトの方を見るものだから、どうしても気になってしまう。

なにより、ユキトはそんなアラムの姿に見覚えがある気がした。場所こそ違ったが、仕種は変わらない。その記憶が間違っていないのならば、このあとアラムがユキトに聞いてくることは……。

「なあ、ユキト。【勇者】になれるかもしれないとしたら、どうする？」

ああ……やっぱり。

この世界には、まだ勇者が必要なのか。

想像していたとは言え、いざ聞くとなんだか苦笑しか湧いてこない。

「勇者、か。そうだな。もしなれるとするんだったら……」

アラムの方を見る。かつて、ユキトが旅をする中で、仲間を護るために命を投げ出した男だ。

そして、ユキトの親友。

もし、今回も勇者として旅をすることになるのだったら、俺は

「もし、勇者になれるのだとしたら、俺は全てを救える勇者になりたいな」

「全て？」

「ああ。世界。国。人々。仲間。勇者として、みんなに希望や幸せ

を届けたい。なにより、友と喜びを分かち合えるようになりたいな」
前回の旅では、その大半を救うことはできた。だが、着いたら死んでいた村があった。判断を間違えたせいで、無関係の人が亡くなった。目の前から消えた仲間がいた。

その度にユキトの心に傷が走り、

「おいおい、随分と欲張りな勇者様だぜ。でも、そうか……そういうのもいいな。気に入った！俺もそれを手伝うぜ」

笑いながらアラムは言う。

「俺は本気なんだけど……」

「もちろんじゃねえか。やるからには本気。妥協なんてしないし、させないぜ」

そうだった。アラムは適当なところはあるが、妥協をする男ではなかった。

なら、ユキトもそれに答えるべきだろう。

「妥協はナシか。まあもしなったら、やることに妥協はしないさ」
ありえないだろうけど、とユキトは苦笑するが、内心はほぼ確定だろうな……とのんきそのもの。

「いや、冗談とかじゃなくて、あるかもしれないんだぜ？」

「かもって言うてるし……」

「それは、お前のさっきの説明を妄想に取り付かれたやつとの与太話としないならの話だけだな。絶対にそうって言えるようなものでもあれば別だけどよ」

いまのユキトは異世界で最後に着ていた普段着だ。元の世界に還ったときに、なるべく違和感を残さないように地味な服だし、こちらでもよくあるデザインだ。もっとも、勇者としてのユキトが全力で動いてもそう簡単には破れないような丈夫な素材を使っているが。

とにかくそんな格好だから、信じてもらう決定的なものにはならない。初めて召喚された時は学生服だったため、それなりに説得力もあったような気はするが、いまはないものだ。願っても仕方ない。

他に身につけているものといったら、アリスティから貰った雫のネックレスくらいだ。【聖剣】は、次の【勇者】が現れるまでまた宝物庫の中に眠っている。

というか、どちらもアラムに見せたらアウトだ。異世界から来たとは言ったが、ユキトは現代日本からとしか言っていないし、この世界では比較的広く知れ渡っている王家の首飾りと【聖剣】を見せるのはまずい。

【聖剣】は現物を見たことがある人はないから、なんとなくとしても、ネックレスは完全にアウトだ。

いや、むしろ【勇者】のことを話してネックレスも見せたら信じてもらえるのでは。

でもそれはそれで面倒なことになりそうな予感がするわけで……。ユキトが悩みに悩みまくっていると、アラムが少し笑って口を開いた。

「そんな深刻そうな顔すんなって」

「いや、まあ……本当に証拠とかないからどうしたもんかと」

気を晴らそうとしてくれたのだろうが、ユキトにはイマイチ効果がない。それを感じたのかはわからないが、今度はアラムも考え込む。ユキトはユキトで、自分自身での変わらない問い掛けと答えの真っ最中だ。

そんなユキトと違ってアラムが悩むそぶりを見せたのは少しの間だけだった。

「確かめにいくか！」

「へ？」

なにを？

不意打ちをくらったせいで続く言葉が出ず、ユキトの口からは変な声だけが出た。だがアラムはそれも眼中にないようすで、言葉を続ける。

「行くんだよ。ここ最近【勇者】を召喚するって噂だった都市に！」
そしてユキトはその言葉に微かな既視感を感じた。

正確な時こそ覚えてないが、たしかにユキトは知っている言葉だ。そう。あの時、『アラム』にかけられた一言から始まった。

「魔法大国、【王都シトノーシア】にだ！」

ただの学生だったユキトが、【勇者】となる長けれど短かった旅が。

「一緒に行こうぜ。俺が案内するしよ。もちろん、行くよな？」

あの時の自分、どう答えただろうか。たしか不安になりながら、しどろもどろに答えた気がする。

いまはどうだろう。

決まっている。

「おう、もちろんだ！」

静かな笑みを浮かべながら、ユキトは盛大に返事をした。

「なるべく早いほうがいいよな。まずはこの森を出て俺の村んところ」

「いいのか？ 急に行ったりしてよ」

「良いの良いの。飯と寝るとこは俺の住居で住むから、村にはなんの迷惑もかかんねえよ」

そういえばそうだったか、とユキトはひとり合点する。たしか一度説明を受けた。かなり忘れてはいるが。

「だがその前によ、ユキト……」

「ん？ なんだ？」

「テメエが食わないなら、俺はそっちの肉も頂くぜ！」

「あつ！？ おい、アラム！」

ユキトの不意について手の中で遊んでいた串（ラスト一本。肉はまだ何切れかあり）を瞬時に奪った。

なんとかユキトは取り返そうとするが、ヒラヒラと串が宙を舞ながらもアラムの口へ肉が入っていくあたりアラムの方が一枚上手だ。諦めて残りの肉串を食べようと手を伸ばすユキト。

「な、ない！？」

だが現実はその甘くはなかったらしい。

「俺、まだ二本も食ってないのに……」

ユキトの悲痛な呟きが零れる中、アラムの側に七本目の串が甲高い音を立てて落ちたのだった。

第五話『あれ、なんか既視感……って、その肉は俺のだ!』（後書き）

デジャヴュを感じていたら、まんまとアラムに食料を取られました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4806z/>

異世界召喚（二週目）・ハードモード（仮）

2012年1月12日22時58分発行